

研究評価の客 観化と多様化を めざして

報告
人文・社会科学
系の研究評価
をめぐる課題

日本学術会議 2019年5月24日

日本学術会議第一部会員
人間文化研究機構国立国語研究所
木部 暢子
nkibe@ninjal.ac.jp

発表の流れ

- 人文・社会科学の研究評価に関するこれまでの提言等
- 提言に対してどのように対応してきたか。
- 人文・社会系分野の評価指標とは？

人文・社会科学の研究評価に関する これまでの提言等

- **声明** 日本学術会議(2001)「21世紀における人文・社会科学の役割とその重要性—「科学技術」の新しいとらえ方、そして日本の新しい社会・文化システムを目指して—」
- **報告** 第19期日本学術会議第1部(2005)「人文・社会系の分野における研究業績評価のあり方について」
- **提言** 日本学術会議日本の展望委員会人文・社会科学作業分科会(2010)「日本の展望—学術からの提言2010 日本の展望—人文・社会科学からの提言」
- **提言** 日本学術会議第一部人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会(2017)「学術の総合的発展をめざして—人文・社会科学からの提言—」

声明 日本学術会議(2001)「21世紀における人文・社会科学の役割とその重要性－「科学技術」の新しいとらえ方、そして日本の新しい社会・文化システムを目指して－」(1/2)

現状及び問題点

- 科学技術の概念が自然科学に偏重して理解され、研究環境の整備もバランスを欠いている現状は、人文・社会科学の創造的発展を阻害しがちである上に、自然科学の発展に対してもマイナスの影響を及ぼす可能性をもっている。
- 人文・社会科学は自然科学と相互に補完的な役割を担っているのみならず、自然科学とは異なる発想と手法によって、科学技術に対して独自の貢献を行う可能性をもっているからである。
- 日本の科学技術のバランスのとれた発展のために、自然科学と人文・社会科学の統合的・融合的な発展を促進する学術研究体制を、早急に整備することが必要である。

声明 日本学術会議(2001)「21世紀における人文・社会科学の役割とその重要性－「科学技術」の新しいとらえ方、そして日本の新しい社会・文化システムを目指して－」(2/2)

声明の内容の要点

- ① 学術の統合・融合を通じて、科学技術と社会との望ましい関係をきり拓くことができるという文明的展望を、内外に発信しなければならない。
- ② 科学技術概念をひろく人文・社会科学へと拡張し、人文・社会および自然科学諸分野が調和のとれた発展をすることが重要である。
- ③ 科学技術の全体的発展のために、科学技術総合戦略を束ねる「かなめ」として人文・社会科学を位置づけるが必要である。
- ④ 科学技術基本計画の運用に当たっては、人文・社会科学の役割を明確に位置づけ直す必要がある。

報告 第19期日本学術会議第1部(2005)「人文・社会系の分野における研究業績評価のあり方について」(1/2)

- 大学・研究機関等の活動についての評価が重視されるようになった今日、研究業績の評価の基準や方法の整備があらためて課題となっているが、学問分野ごとの研究のあり方や業績評価をめぐる状況には、少なからず差異があり、それぞれの実状をふまえた評価のあり方が検討される必要がある。
- 人文・社会系の分野の場合には、その研究の特質として、研究者の価値観、個人的・文化的・社会的背景とかかわる洞察や解釈が重要な意味を持っており、研究業績の評価には十分な慎重さが求められる。
- 最近、論文点数、国際的学会誌への寄稿、被引用度等の量的指標に基づいて業績を評価する傾向があるが、こうした方法の機械的な適用は、きわめて偏った評価結果を導き、人文・社会系の学問研究の進展に好ましくない影響を及ぼしかねない。
- 研究業績の評価において重視されるそれぞれの分野の専門家集団によるピア・レビューについても、人文・社会系の分野の場合には、効果あるピア・レビューの基盤をなす研究者のコミュニティが分化されており、コミュニティ相互に価値観の相克が見られるなど限界がある。

報告 第19期日本学術会議第1部(2005)「人文・社会系の分野における研究業績評価のあり方について」(2/2)

- このような特色を持つ人文・社会系の分野の研究業績の適切な評価のために、各学協会等において研究業績の評価についての積極的な研究を進める必要がある。
- 日本学術会議はそれぞれの分野に相応しい評価のあり方の検討に対する指導性を発揮し、広汎な広がりをもった研究者のコミュニティの確立を進める必要がある。それとともに、関係機関での以下の諸点についての配慮が必要である。
 1. 大学・研究機関等の研究評価を行う機関において、人文・社会系の各分野に相応しい業績評価のあり方の研究を進め、適切な基準・方法を整備すること。
 2. 研究内容を含めたピア・レビューに対応する研究業績のデータベースの整備を進め、人文・社会系の分野を含めて適切な共通的な研究業績情報の様式を整備すること。
 3. 外形的基準による評価の妥当性と限界を明らかにするために研究評価を行う機関において積極的な研究を行うこと。
 4. 大学・研究機関等の人事選考における研究業績の評価にあたって、各学問分野の特性に応じた配慮をおこなうこと。

提言 日本学術会議日本の展望委員会人文・社会科学作業分科会(2010)「日本の展望—学術からの提言2010 日本の展望—人文・社会科学からの提言」(1/1)

(2) 多元性・多様性を尊重する社会を育てる

- グローバル化にともなう日本社会の変化の中で、異なる文化を背景に持つ人々が多元性・多様性を互いに尊重しながら、平和的に共生する社会を実現するための取組みが焦眉の課題となっている。文化の多元性・多様性を尊重するためには、日本国内の行政的・法的整備を進める必要がある。それと同時に、多元的で多様な価値を理解し、尊重する社会意識を高める土壌を形成することが極めて重要である。

(7) 世界史的人間主体を育成する

- グローバル社会において望まれるのは、国民国家の枠を超えて世界的視野で問題の所在を発見し、世界的規模で問題の解決を図ろうとする、地球市民の育成である。そのためには、歴史の共有が不可欠である。個別の国の歴史を世界史のなかに位置づけ、共有可能な世界史を多言語で叙述することが、人類の大きな課題となるであろう。それが、世界的視野で問題を発見し、その解決に取り組むことのできる人間主体の育成へとつながることは間違いない。

提言 日本学術会議第一部人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会(2017)「学術の総合的發展をめざして—人文・社会科学からの提言—」(1/3)

(2) 研究の質向上の視点から評価指標を再構築する

- 人文・社会科学領域での研究の質向上を図るには、研究の多様性、文献への依存度の高さ、成果の公表方法、「スロー・サイエンス性」といった人文・社会科学の特性を考慮した評価方法や資金配分が策定されるべきである。
- そのためには、人文・社会科学の側でも、研究成果の公開・共有・可視性の向上を図り、分野の特性に応じた評価指標を確立させるべく努力しなければならない。

提言 日本学術会議第一部人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会(2017)「学術の総合的發展をめざして—人文・社会科学からの提言—」(2/3)

(3) 大学予算と研究資金のあり方を見直す

- 1990年代半ば以降、日本の高等教育政策は、基盤的経費から競争的資金へと研究資金の比重を移してきた。
- 「期間限定の研究プロジェクトへの支援」という性格が強い競争的資金では、中長期にわたる教育・研究基盤の脆弱化を防ぐことはできない。中長期的なスパンで研究成果を捉えることが多い人文・社会科学を發展させ、その特質を活かすためには、安定的経費が不可欠である。
- また、変化の激しい現代世界に対応するには、人文・社会科学においても、たとえば、データベースの構築、資料電子化の基盤整備、共同利用体制の計画的推進など、中長期的な視野に立つ「大型」経費が必要である。
- 一方、安定的経費の削減は、とりわけ地方国立大学に深刻な打撃を与えている。地方における文化継承・社会問題分析の専門家集団として、地方国立大学の人文・社会科学系学部・学科が果たしてきた役割や将来の可能性に十分配慮した人員配置と予算措置を国が講じることが望まれる。

提言 日本学術会議第一部人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会(2017)「学術の総合的發展をめざして—人文・社会科学からの提言—」(3/3)

(5) 総合的学術政策の構築をはかる

- 日本では、人文・社会科学を含む学術全体を視野に入れた国の総合的政策は存在しない。
- しかし、21世紀社会では「科学技術基本法に基づく科学技術の推進」ではおさまりきらない多くの問題が発生し、それらを議論する必要があることは明らかである。
- 人文・社会科学の振興は、学術全体の総合的かつ調和的な発展を展望して政策化されるべきである。
- 今後、日本における学術の現状と課題を事実に基づいて解明し、広く国民と共有するために、人文・社会科学と自然科学を含め、学術の全領域に渡る「学術白書(仮称)」の作成が必要である。
- それとともに、日本学術会議を中心として「学術基本法(仮称)」の制定などに向けた検討を進めることが望ましいと考える。

これまでの提言等のまとめ

□ 人文・社会科学と自然科学のバランス

- 人文・社会科学と自然科学のバランスのとれた発展(2001)
- 学術全体の総合的かつ調和的な発展(2017)

□ 人文・社会科学の特色

- 科学技術総合戦略を束ねる「かなめ」としての人文・社会科学(2001)
- 多元的で多様な価値を理解し、尊重する社会意識を高める土壌の形成(2010)
- スロー・サイエンス性(2017)

□ 評価に関して

- それぞれの実状をふまえた評価のあり方、人文・社会系の各分野に相応しい業績評価のあり方の研究(2005)
- 量的指標に基づく業績評価の問題(2005)
- ピア・レビューに対応しうる研究業績のデータベースの整備
- 分野の特性に応じた評価指標(2017)
- 研究の多様性を考慮した評価方法や資金配分(2017)

- これらの提言に対して人文・社会科学はどのように対応してきたか。

ほとんど何もしてこなかった。

- 人文・社会系分野の評価指標とは？

第一期国立大学法人評価の研究水準判定において評価者が判定に用いた項目の割合

表2 「卓越した業績」の根拠データ・指標の分野間の違い

	引用		掲載雑誌のIF	受賞	新聞・一般紙での書評・紹介	うち、書評・紹介の内容	学術誌・専門書での書評・紹介	掲載雑誌名	査読のある雑誌への掲載	招待講演・基調講演	Faculty of 1000	他研究者による解説記事	特許化	製品化・実用化	研究を行った研究費
	うち引用数														
総合領域	11%	7%	31%	40%	16%	1%	1%	46%	1%	16%	4%	0%	2%	2%	4%
複合新領域	15%	14%	18%	37%	13%	2%	5%	29%	1%	17%	0%	2%	2%	3%	6%
人文学	5%	2%	0%	39%	26%	14%	19%	7%	2%	7%	0%	0%	0%	0%	4%
社会科学	7%	4%	7%	36%	9%	1%	13%	38%	7%	9%	0%	0%	0%	0%	2%
数物系科学	25%	21%	13%	28%	11%	0%	2%	36%	1%	29%	0%	2%	1%	0%	1%
化学	14%	12%	11%	31%	15%	0%	1%	37%	0%	28%	0%	2%	1%	2%	6%
工学	11%	9%	17%	56%	9%	1%	1%	32%	0%	41%	0%	0%	4%	4%	8%
生物学	19%	16%	58%	9%	14%	0%	1%	80%	0%	11%	5%	6%	1%	0%	0%
農学	17%	16%	53%	34%	15%	0%	1%	63%	0%	18%	2%	3%	3%	1%	3%
医歯薬学	16%	12%	59%	19%	17%	0%	1%	71%	1%	13%	1%	3%	4%	1%	3%
合計	15%	12%	30%	33%	14%	1%	3%	47%	1%	21%	1%	2%	2%	1%	4%

(%：第一期国立大学法人評価の研究業績水準判定において“SS”と判定された研究業績のうち、各指標を評価者が判定に用いていた割合)

林隆之(2017)「研究評価の拡大と評価指標の多様化」より

人文・社会系分野の評価指標とは？

分野別研究評価の実態調査(緊急調査)(言語系)の暫定報告

1. 研究者や研究組織の評価（研究業績の評価や研究活動状況の評価）をする際に、一般的に用いられる研究評価基準（評価において見るべき項目や指標など）あるいは研究評価のありかたについて
選択が多かったもの

「内容」に応じて個別に評価するため、数値化できる統一的な研究評価基準はない。

分野内の専門ごとに研究評価基準が異なるので、統一はむずかしい。

研究評価基準について、分野(関連学会等)において本格的に議論したことはない。

人文・社会系分野の評価指標とは？

分野別研究評価の実態調査(緊急調査)(言語系)の暫定報告

2. 研究評価の現状について (B) 分野の研究評価にあたって (a) 非常に重視される、(b) 重視される

論文数	定評ある学術雑誌で書評されたこと
英語論文であること	新聞等で書評されたこと
査読付き論文(定評ある学術雑誌に限る)であること	国際学会発表(共同・自由報告)
査読付き論文(上記以外)であること	国際学会発表(単独・自由報告)
執筆依頼論文(定評ある学術雑誌に限る)であること	国際シンポジウム主催・企画
研究書所収論文であること	国際シンポジウム報告(指名報告)
研究書(単著)	海外での招待講演
研究書(共著)	シンポジウム主催・企画
研究書(編著)	シンポジウム報告(指名報告)
研究書(共編著)	国内での招待講演
一般書(入門書・新書など)	論文・著書等の受賞歴

人文・社会系分野の評価指標とは？

分野別研究評価の実態調査(緊急調査)(言語系)の暫定報告

2. 研究評価の現状について (B) 分野の研究評価にあたって
(d) ほとんど重視されない、(e) 利用できるデータがほとんどない

インパクトファクター
被引用回数
被引用数トップ10%論文であること
翻訳(論文)
ソフトウェア
特許取得数
作品
作品の受賞歴

人文・社会系分野の評価指標とは？

分野別研究評価の実態調査(緊急調査)(言語系)の暫定報告

3. 研究評価の一般的傾向（どちらかといえば強い傾向）について

どちらかと言えば、論文よりも著書(単著の研究書)を重視する。

一般に、著書(単著の研究書)の一章は一論文に相当するとみなされる。

著書(単著の研究書)は研究成果の集大成とみなされ、一般に評価が高い。

日本語による研究成果が一般的である。

一般に、研究評価では、学術面を重視し、社会・経済・文化への効果はほとんど評価対象にならない。

最後に……

- 人文・社会系分野の評価指標とは？

ご清聴ありがとうございました。